OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

フェビアン社会主義の社会政策思想

木　村　正　身

I

イギリスの近代から現代への過渡期の労働史・政治史・社会経済思想史におけるフェビアン社会主義（または，フェビアニズム）の有意味性がどこにあったかについて，いわゆる「ウェッブ神話」(the Webb myth) とその否定論の成立以来，両極端の解釈が形成されてきたようである。あらかじめ言えば，フェビアン協会は，初期メンバーたちの思想の豊富な多様さ――この多様さは，『フェビアン論集』(1889年)においてさえ，なおみられたが――を，執行部中の執行部たるウェッブとショー――1892年以降では，ウェッブ夫妻とショー――のつよい指導力によって，やがて事実上きびしく淘汰し，結局このウェッブ=ショー枢軸自身の思想と行動とにその存在理由を収斂させていったものと考えられるのであるが，そのなかでも最大の中心人物はウェッブであり，かれがホルデーン (R. B. Haldane) とともに1924年の第1次労働党内閣に入閣して以来，ドイツ哲学びいきのホルデーンが中心となってながしたといわれる「ウェッブ神話」の真偽をめぐって，早々にイデオロギー的論議が戦わされたことは，ウェッブ夫人も回顧しているとおりである。(1)

第2次大戦以前の段階においては，たとえば，マルクスの側に立ちながらも議会主義を肯定したマックス・ベアが，1919年に，ＳＤＦの役割を案外に消極的に評価する一方で，すすんでウェッブ神話を協会に拡大することにくみし，「1870年から1890年までの間にあらわれたところの社会改革をめざす多くの団体のうちで，フェビアン協会ほど顕著かつ有益な影響を，教養層の世論と立法とに対しておよぼしたものは，なかった」(2)とか，「フェビアン協会は，労働党形

(1) Beatrice Webb (eds. Barbara Drake and Margaret Cole), *Our Partnership*, 1948; 1975 ed., pp. 7–8, 97.

(2) M. Beer, *A History of British Socialism*, 1919; rep. 1953, Vol. II, p. 274. Cf. pp. 257n, 266.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

成の大きな力となった(instrumental)[3]」としたのに対して，逆に，かつてはみずからもフェビアンであり，協会の執行部にも入っていたことがあり，ドイツないし外交関係にくわしい自由党派ジャーナリストで労働史家でもあったエンサー（R. C. K. Ensor）が，ＩＬＰの民衆的基盤を最重視し，ＩＬＰの組織に対してＳＤＦの偏狭な方法が不断にマイナスの作用をおよぼしたこととならんで，ウェッブ的フェビアニズムもまた労働者階級から遊離する方向にあったことを強調して，1936年に「社会民主連盟〔ＳＤＦ〕の救いがたい異国調，またはフェビアン協会のミドルクラス的怜悧さにくらべれば，ＩＬＰは実際的な社会主義を純粋に民衆的なものとすることへ向けての巨大な前進を代表した[4]」と述べ，いわば超越的にＳＤＦの影響力を，そして内在的にフェビアン神話を，それぞれ否定した，という対照が注目される。エンサーは，『フェビアン論集』の大きい影響力をみとめながらも，労働者階級の指導者たちは，ふつう，あらかじめ社会主義者になってから同書の原理をみとめたが，同書によって社会主義者になったということはまずなかったとし，ＩＬＰをみちびいたのも同書よりもむしろベラミーやクロポトキンの本であった，としている[5]。このように，第２次大戦以前において，フェビアン社会主義評価は，むしろマルクス主義との関係からは相対的にある程度独立して進行していたのであった。ちなみに，これはイギリスの政治史において，争点がしばしば階級区分をかならずしも直截に反映せず，むしろブルジョア・ムードのもとに指導者ごとに，すなわち「ヨコ割りではなくてタテ割り」になってあらわれることの１例かもしれない。

第２次大戦後には，第１に，従来未開拓だった諸資料の網羅的検討を加えながら，一段とアカデミックなレベルにおいて，しかし同時に第２に，解釈者自身のイデオロギーとかなり密接に相関したかたちで，そして第３に，あたらし

---

(3) *Ibid.*, p. 288.
(4) R. C. K. Ensor, *England 1870 - 1914* (The Oxford History of England, ed. George Clark, Vol. 14), 1936, p. 222. Cf. Ensor, Memorandum on the ILP, Sept. 1907, Fabian Society archives; Paul Thompson, *Socialists, Liberals and Labour, The Struggles for London 1885 - 1914*, 1967, p. 124.
(5) Ensor, *England 1870 - 1914*, p. 334.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

い論点として，とくに「福祉国家」および自治体社会主義の基礎づくりとの関連を問うかたちで，フェビアン神話の真偽についての包括的な検討と論争の再展開とがみられたと言ってよいであろう。

いま，フェビアン神話の内容を，便宜ホブズボームの説明を参考にしながら整理すれば，つぎのとおりとなる。(6) すなわち，フェビアン社会主義の独自な史的役割は，第1次大戦以後はほとんど消滅した，もしくは労働党のイデオロギーに発展的に吸収されたとしても，協会の創設（1884年）から1914年までの時期におけるその公的生活への影響・感化は，協会自身が終始自負し鼓吹してきたとおり，つぎの諸点において深甚なものがあった。すなわち，第1に，それは，スタートにおいてこそ労働運動の評価や労働運動との接触におくれたが，やがてタイムリに独立の労働者政党運動に関与し，労働党の結成をインスパイアし，これに参画したということ。第2に，フェビアン社会主義は，「イギリスにおけるマルクス主義の魔法をうちやぶ」(7)り，この国の社会主義の概念を書きかえたということ。第3に，現代的社会改革の具体的な提案を示し，「福祉国家」の基礎づくりに貢献したこと。第4に，自治体社会主義（municipal socialism）をすすめ，とくにロンドン州議会〔ＬＣＣ〕の基盤確立に貢献したということ。——われわれは，これらの諸点のいわば自己宣伝的な言質をショー，ピーズ，ウェッブ夫妻ら自身の執筆物から容易に拾いだせるのであるが，(8) しかもか

(6) E. J. Hobsbawm, *Labouring Men, Studies in the History of Labour*, 1964, esp. Chap. 14, "The Fabians Reconsidered," ホブズボーム，鈴木幹久・永井義雄訳『イギリス労働史研究』ミネルヴァ書房，1968年，「14. フェイビアン主義者の再検討」。

(7) Edward R. Pease, *The History of the Fabian Society*, 1916, p. 236.

(8) G. Bernard Shaw, *The Fabian Society: Its Early History*, Fabian Tract No. 41, 1892; E. R. Pease, *op. cit.*（巻末の Appendix I, A: Bernard Shaw, "On the History of Fabian Economics" とも）; S. Webb, *Socialism: True and False*, Fabian Tract No.51, 1894; S. & B. Webb, *The History of Trade Unionism*, revised ed. 1920, esp. p. 414 & n（荒畑監訳，飯田鼎・高橋洸訳『労働組合運動の歴史』日本労働協会，上巻，476－477ページ）．フェビアン協会の業績の一般化や宣伝をもっぱらショーにまかせていたウェッブ自身が，ここで「1889年からあと，イギリス社会主義運動の主要な努力は，なにか突然の，完全なもしくは同時的な革命をもたらすことではなく，集産主義的な思想や集産主義的な諸原則をもっ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

れらが皆大いに長命して公式的な自画自賛のフェビアニズム解釈——「フェビアン神話」——を終始雄弁に語りつづけたため，こうした解釈が有力に継承され，それはイギリスにおけるマルクス主義の影響についての過小評価志向と事実上表裏一体のかたちで維持されて，第2次大戦直後の労働党内閣時代に頂点に達した。

このことに加え，ウェッブ夫人による1892－1911年間の夫妻共同作業の自己紹介（『われわれの提携』，1948年）の出版にも促進されて，1950年代に，多数の学位論文を含む活発なフェビアニズム研究が進行した。このなかで，ウェッブ夫妻およびショーの長命による影響の持続にもなお支えられながら，フェビアン社会主義にたいする高い評価態度は，マコービー（S. MacCoby），ブリッグズ（A. Briggs），ペリング（H. Pelling）らの有力な社会史・労働史家を含んで大局的に維持され，さらにコール夫人（Margaret Cole）によるあたらしい公的なフェビアン社会主義研究（1961年）の刊行によって再確認された。(9) もとよりこのあたらしいレベルでは，ウェッブ夫人もみとめたように，かつての「ウェッブ神話」——S．ウェッブは卓越したオール・マイティで普遍的な存在として国家・地方自治体・教会・トーリー党・自由党・労働組合・労働運動のどこにでも操縦力を発揮したという認識——を，もはやそのままみとめるものではなく，だがまた，ウェッブが「時代おくれ」で「男性的民主主義とは絶望的に絶縁したブルジョア・ペダント」で「こわれた神話」にすぎないとする批判も一面的なものとして受けとめ，結局かれが「“オール・パワフル”だと

て現在のあらゆる社会の力にしみこませることに向けられた。」「この発展の場合に，フェビアン協会の業績がなんらかの役割を果たしているということができる。」と，控え目ながらも満々たる自信をもって要約していることが，注目される。なお，初期フェビアンたち自身によるこの理解の直接の総括としては，G. Bernard Shaw, “Socialism: Principle and Outlook” (rep. from *Encyclopaedia Britannica*, 14th ed. 1929) & “Fabianism” (rep. from new ed. of *Chamber's Encyclopaedia*), Fabian Tract No. 233, 1930.

(9) S. MacCoby, *English Radicalism 1886－1914*, 1953 (cf. *English Radicalism 1853－86*, 1938); Henry Pelling, *The Origins of the Labour Party 1880－1900*, 1954; Asa Briggs, *Victorian Cities*, 1963; Margaret Cole, *The Story of Fabian Socialism*, 1961.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の判決，“無意味”との判決のどちらもひとしく的をはずれている」[10]という判断にたって，ウェッブの，そしてかれが操縦したフェビアン社会主義の，一定限度内での重要な影響力を，あらためてシリアスに評価しようとするものであったと言ってよいであろう。

しかし他方，そうした解釈路線に対抗して，フェビアン協会およびウェッブ以下個々のフェビアンたちにかんするあたらしく開拓された資料群の詳細な検討を経たうえで，ウェッブとその協会との神話性の根拠を大局・細部の両面でともに否認する研究動向が，エドワード・トムスン（E. P. Thompson），アラン・マクブライア（A. M. McBriar），ホブズボーム，ポール・トムスン（Paul Thompson）らにより，親マルクス主義的視角から1950年代末以降，とくに60年代に活発に打ちだされるにおよんで[11]，議論の状況はさらに新局面を迎えたと言ってよい。もっとも，70年代では，むしろ未刊資料の探索作業のつづきがアメリカ系譜の研究者を中心に進行中であって[12]，そこには基本的な解釈上の新展開はほとんどみられないようである。というのも，ちょうどE.P.トムスンの詳密で徹底的なウィリアム・モリス研究がモリス解釈の争点を決定的に総括整理したように，おそらくマクブライアおよびP.トムスンの網羅的な吟味を踏まえてのホブズボームの総括と補充とがほとんど決定的な解釈水準を提示したと思われるからである。

さて，本稿での筆者の課題は，およそ以上のようなフェビアン社会主義評価の推移を踏まえながら，まずとくにフェビアン神話全面否定の立場から事態を総括したホブズボームの独自な諸論点に注目し，つぎにその諸論点が触れ残し

---

(10) B. Webb, *op. cit.*, p. 8.

(11) E. P. Thompson, *William Morris, Romantic to Revolutionary*, 1955, revised 1977; A. M. McBriar, *Fabian Socialism and English Politics 1884-1914*, 1962; Eric Hobsbawm, *The Lesser Fabians* (“Our History” Pamphlet, No. 28), 1962; ditto, *Labouring Men, Studies in the History of Labour*, 1964 (esp. Ch. 14); Paul Thompson, *Socialists, Liberals and Labour: the Struggle for London 1885-1914* (esp. Intro. & Chaps. VII, X), 1967.

(12) たとえば，Norman & Jeanne MacKenzie, *H. G. Wells, A Biography*, 1973（イギリス版：*The Time Traveller: A Biography of H. G. Wells*, 1973); ditto, *The First Fabians*, 1977.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

たと思われる若干の問題局面を検対し，この作業をつうじて，ウェッブ＝ショー枢軸によって代表されたものとしてのフェビアニズムが，すぐれて独自な集産主義的・ロマン的な社会政策思想としての性格を荷っていたと思われることを，とくに現代的「福祉国家」状況との長期的関連で，大局的に考察することにある。社会政策の具体的諸提言の細部には，とくに触れる以外は，紙幅の関係でたち入る余裕がないことを，あらかじめおことわりしておきたい。

II

ホブズボームは，一方において社会民主連盟〔ＳＤＦ〕が，その指導者ハインドマンの個性と誤謬とに伴う種々の重大なデメリットにもかかわらず，チャーティズムの伝統を継承したイギリスの前衛的・知的エリート労働者層みずからによって自然に形成された本格的にプロレタリア的・体系理論的な，そして直接革命行動的ではないがミドルクラス的改良主義の包囲に対しては断じて非妥協的・党派的でありつづけたところの地方分権的・自律的・持続的な組織，「イギリスにおいて国民的重要性をもった最初の近代的社会主義組織」として，現代イギリス労働運動の進展にたいしてきわめて重要な貢献をしたこと，ハインドマンは，じつのところ「社会民主連盟の創設者というよりもむしろその目じるし」にすぎず，連盟の基本的方向と背馳するかぎりかれは不断に見放されたこと，を指摘するとともに，[13] それとはまったく対照的に，フェビアン協会が，少数の指導的フェビアン，とくにショーおよびウェッブ夫妻の強力な操縦によって，その当初の多様な諸要因を淘汰され，事実上その特質がウェッブ＝ショー枢軸の思想に収斂したことを認定したうえで，すくなくとも第１次大戦以前のウェッブ夫妻＝ショーのフェビアニズムの事実上の影響力が，伝統的ミドルクラスに対しても，また労働者階級に対しても，ほとんどなかったということを総括的に論断し，この脈絡においてフェビアン神話の諸内容を逐一否定したのであった。

---

(13)　Hobsbawm, *Labouring Men*, Ch. 12.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ついでながら，ここで，ホブズボームがかれのいわゆる「群小フェビアンたち」をどう観察しているかについて，概観しておきたい。ホブズボームは，1962年のタイプ謄写パンフレット形式の1論文[(14)]において，ウェッブ夫妻＝ショー以外のフェビアンたちの周辺的性格について論証している。同論文は，シャーロット・ウィルスンには触れず，また，アニー・ベサントについても，「ほとんどフェビアンとして分類しがたいし，いずれにせよ協会との関係は短命だった」として論外としたのち，かれのいわゆる "the lesser Fabians" をブランド(Hubert Bland)，クラーク(William Clarke)，ウォラス(Graham Wallas)，オリヴィア (Sydney Olivier) の4人にしぼり，その1人1人を集中的に吟味し，それぞれの理由でウェッブ＝ショー路線から切りおとした。——

まず，ブランドは，「主要なフェビアンたちのうちでは最も型やぶり」であって，親帝国主義的トーリーから転じた，権威主義的社会主義者で，ＳＤＦの活発な会員でもあり，資本主義体制の変革必然認識の点ではむしろドイツ社会民主党員風に明確であり，「主として後年の改革派の簒奪者たちに対抗して創立メンバーとして協会指導部に残る権利を主張するために残った，という印象をぬぐえない」ていのフェビアンとして，「古顔連中」("the Old Gang") のなかにいながら，「滲透」(permeation) によって自由党員を社会主義者に転ぜしめるという協会の基本政策目標は幻想であり，ウェッブ流の実務集産主義は「えせ社会主義」("sham socialism") で，ウェッブ夫妻の「少数派報告」も「まったく社会主義を見うしなったもの」だと，きびしく批判したが，しかもＩＬＰには関心を寄せず，結局かれ自身のトーリー社会主義信仰もまた幻想であった。つぎにクラークは，イギリスではひさしくめずらしいマッツィーニ＝カミュ＝ペレ型の人物で，「かくれたイギリス・ジャコバン主義の伝統」を継承して急進的民主主義そのものを独立に熱烈に主張した左派自由主義者であり，資本主義における独占の不可避な進展が産業における民主主義の展開とますます衝突するとし，「民主主義の将来を，まともにマルクス主義的歴史分析で基礎づけ

(14) Hobsbawm, *The Lesser Fabians*, Our History Pamphlet, No. 28, 1962. なお，これは小冊子なので，以下の引用文の出所ページは，後掲以外，省略する。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ようとする試み」によって協会に特異に貢献し，民主主義の経済的達成に期待した。かれもまたウェッブ流の「滲透」観にはげしく反対し，最後には協会に幻滅して1897年に退会し，早く死んだが，本来はかれの志向は，J.A.ホブスンやH.W.マシンガムや *Progressive Review*, *Echo*, *Daily News* の系列の急進自由主義（ロイド・ジョージ主義の母胎）なのであって，それはウェッブ＝ショーの方向とは異質のものであった。

ウォラスは,「うたがいもなくブリリアントなフェビアン・グループのなかでも最良のアカデミックな頭脳」として，ウェッブ＝ショーに比較的に最もよく順應・協力した熱烈な自由主義者だが，元来ミルやシジウィックとおなじ経路で既成信仰に反発する個人の社会的良心の展開としての社会改革を考え，しかし一歩をすすめて，理性的・科学分析的でプラグマティックな小さな改革の累積・漸進自体が社会主義だとし，階級視点を欠き，経済理論におけるジェヴォンズ対マルクスの対立を，どうでもよいものだと考えた。結局かれは，経済的・唯物的思考はすべてではないとして，人間性の重要さの強調に回帰し，社会主義からしりぞき，社会政治心理学者として自由党へ戻ってしまった。最後にオリヴィアは，ブランドと同様にＳＤＦの活発な会員でもあったが，じつは「奉仕による魂の救済にもえた上流階級の１人として社会主義に到達」したところの反マルクス的な急進主義者で，しかし帝国主義反対論者でもあり，ショー＝ウェッブ的なフェビアン主流の日和見主義に批判的で，かれの倫理的な関心は主流の経済的・実務的関心と不断にくいちがったけれども，やがて海外駐在官僚として多忙となり，1890年以降は社会主義者として活動せず，フェビアン主流との対決の機会もないままにおわった。

――こうしてホブズボームは,「通常の範囲と多様性とをもった左翼的諸見解をふくむ１団体」だったフェビアン協会が，せっかく貴重な革命的社会民主主義の要素（ブランド，オリヴィア）や，福祉国家政策の先鞭をつけた急進自由主義的要素（クラーク，ウォラス）を含みながら，これらの要素が早々にウェッブ＝ショー的イデオロギーによって整理淘汰されていった経緯に注目したのであった。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

さて，ホブズボームのフェビアン神話否定の論点を筆者なりに整理すれば，つぎの7つとなる。[15] ——第1に，「フェビアンたちは，はじめから漸進主義運動として出発したのではなく，1880年代のおわりにかけて，主としてシドニー・ウェッブとその“古顔連中”との影響——以後は，これが協会を支配——のもとに，はじめて漸進主義へと展開したのにすぎない。」[16] 第2に，「かれらは，なんら労働党のパイオニアではなかった。むしろ逆に，自由党への，そして時折は帝国主義者や高級官僚への“滲透”につとめた。」[17]「1880年代の成熟期の他の社会主義者や労働党のグループとは反対に，かれらは，実際にたいがいの場合，労働者階級の独立の政党の設立に反対したし，また，反対しなかったかぎりでは，“大部分あいまいであまり有用でなかったかれらの援助なしでも，ＩＬＰおよび労働党が出現したであろうことは，たしかなように思われる”（マクブライア）。」[18] フェビアン協会は，ケア・ハーディとそのＩＬＰの結成に対しては，エンゲルスの小グループほどにも寄与せず，また，労働党への寄与の程度は，「ＩＬＰの場合よりも比較にならぬほどずっと少なく，マルクス主義派のＳＤＦの寄与よりもいちじるしく少なかった」[19] のであり，かれらは，なるほどＬＲＣに加わりはしたが，初期のうちにほとんど脱退し，1914年にウェッブが労働党執行部に加わったのも，滲透政策が明白に破産して他に選択の余地がなかったからであって，それ以前では，新政党を必要とは考えていなかった。

第3に，ふたたびマクブライアも指摘するように，マルクス主義は，そもそもイギリスでは「魔法」を発揮したことがそれまでなかったから，それを「うちやぶる」こと自体もありえなかったわけだし，フェビアンたちの独自なマルクス主義批評（たとえば，ショー）が有効だったという証拠もなく，「『フェビアン論集』でショーが提出したような新古典派の限界主義を含めて，マルクス

---

(15) *The Lesser Fabians* は，*Labouring Men*，1964 に先だち，以下の第4論点をのぞく各論点を指摘していた。

(16)，(17) Hobsbawm，*Labouring Men*，p. 251. 訳，227ページ。ただし，以下の引用訳文はかならずしも同訳書によらない。

(18) Cf. McBriar，*op. cit.*，p. 349.

(19) Hobsbawm，*Labouring Men*，p. 251. 訳，227ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

経済学にたいするかれらの私的代用品は，ほかのイギリスの非マルクス主義的または改良主義的な社会主義者たちに，ほとんどなんらの感銘をも残さなかった。[20]」第4に，すすんで言えば，かれらのイデオロギーも政策もともに，その他の左翼とまったく関係をもたなかった。「社会主義諸グループのうちでフェビアンたちだけが，独立の労働者政党の結成に反対し，ボーア戦争反対を拒み，左翼の伝統的な国際的・反戦的努力になんの関心をも示さず，また，かれらの指導者たちは，1889年や1890年の労働組合復活に実際上なんら参加しなかった。[21]」

第5に，それではかれらは，肝心の自由党への「滲透」という「この時期に発見されうる一貫したフェビアン的政策というのに最も近いもの」については，成功したかといえば，これさえ，答えは否であった。「かれらは政党政治……に完全に失敗した[22]」だけでなく，すすんで自由党帝国主義者と運命をともにする一方で，キャンベル－バナマンやロイド・ジョージのような自由党復活の中心人物の評価もできぬという政治感覚欠如ぶりを露呈した。第6に，フェビアンたちは，なるほど労働運動のための宣伝材料やさまざまな具体的改革諸命題の起草者として福祉国家の基礎づくりに最も直接的な影響をおよぼしたし，とりわけウェッブ夫妻は，1890年代初期から，政府・野党・官僚上層部の現実および将来の多くの政策立案者たちと接触したけれども，実際には，社会改革の特殊フェビアン的諸提案は，まれにしか採用されなかったし，採用されたときでも，マクブライアの指摘のとおり，トラクト群で打ちだしたような計画諸項目が再現されたことはなく，1906－14年の特殊な改革も，将来の福祉国家の基礎たる理論も，むしろ他の人々なりグループ——たとえば，ベヴァリッジやJ．A．ホブスンやケンブリッジのマーシャル・グループなど——が先駆だ

(20)　Hobsbawm, *ibid*. 訳，227–228 ページ。
(21)　Hobsbawm, *ibid*., p. 253. 訳，229ページ。
(22)　Hobsbawm, *ibid*., p. 253. 訳，229ページ。同旨，P. Thompson, *op. cit*., pp. 96–97. なお，「自由党への滲透」の神話のひろがりの主因を，ポール・トムスンはとくにショーおよびウェッブ夫妻の長命に帰している。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ったという理解のほうが，ずっと有力である。[23] 第7に，フェビアンたちが地方自治体（とくにロンドン）の改革者だったと自称した点も，実際にはずっと割引かれてしまうことは，ポール・トムスンのくわしい吟味の結果，明白である。[24]

III

さて，ホブズボームは，指導的なフェビアンたちが，その活発な活動や執筆・宣伝能力や自己犠牲にもかかわらず，実際には，以上のようにおよそイギリスにおける重要な事項においてみずからの影響力をおよぼすことにことごとく失敗したこと（換言すれば，こうした影響力をふるったのは，大陸では本来の意味の社会主義的知識人であったのに対して，この国ではもっぱら自由党的知識人——ホブスン，ハモンド夫妻からマーシャル，ケインズ，ベヴァリッジにいたるまでの，フェビアンでなかったリベラルたち——にかぎられたということ）を，網羅的に鋭意指摘したうえで，あらためて，その失敗の根拠をポジティヴにたずね，これを，まず即自的には，かれらの思考・行動パターンの顕著な「無定型性」(a-typicality) に，すなわち，かれらがイギリスの現実政治上の伝統的ミドルクラス主流（自由主義や保守主義），労働者階級（プロレタリア社会主義）のいずれの立場にも属さず，つまり，「イギリスの政治的伝統のうちになんらの地位をもたなかった」こと，に帰するとともに，すすんで，こうした特異な無定型的なイデオロギーとしてのフェビアニズムがこの時期のイギリスであえて出現することになった所以を，「2つの線に沿うて，すなわち，1880年代のイギリスの知的状況と，フェビアンたちの社会的構成〔階層所属〕と」[25] から説明できるとした。

---

(23) Hobsbawm, *ibid.*, pp. 251-2. 訳，228ページ。

(24) Hobsbawm, *ibid.*, p. 252. 訳，228ページ。ちなみに，ポール・トムスンは，「ベアトリスおよびバーナード・ショーにはげまされて，シドニー・ウェッブはフェビアン伝説の英雄となった。かれの自己欺瞞の増大は，かれとロンドン州議会（ＬＣＣ）における進歩党との関係において明白に示されている」とし，ＬＣＣ選挙における労働者出身候補者の推進にかんするＩＬＰの実質的な努力に終始水をさしつづけたウェッブ夫妻の態度を詳細に解明している。Paul Thompson, *op. cit.*, pp. 144-165.

(25) Hobsbawm, *Labouring Men*, p. 255. 訳，231ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

すなわち，第1に，19世紀中葉イギリスにおける自由放任を中心とした独特な知的安定状況（さらにそれを支えた自由主義経済，1832年選挙法にもとづいた政治体制，イギリスの国際政治的・軍事的優位，という3つの柱）が，1860年代の選挙法改正，アメリカ・ドイツ・日本の進出，1873年以降の“大不況”といった事情によってくずれ，これにおうじた知的調整として一般に個人主義的思想から集産主義的思想（「いまやわれわれは皆，社会主義者だ」という認識）へのシフトが生じたわけだが，このための現実的な社会理論，とくに国家・ビジネスのあたらしい諸活動を正当化する理論の展開には，マルクス主義者をべつとすれば，リベラルな急進主義からの左翼的前進という主流のノーマルなゆきかた（当初段階では，ほとんどこれしかなかった）と，自由主義と絶縁して帝国主義的，大企業・官僚サイド（独占擁護）的，能率主義的に傾いた右翼的方向とがあり，後者は，外国起源のさまざまな非自由主義的理論——ヘーゲル哲学，歴史派経済学，講壇社会主義，実証主義，実践的（大陸型）社会主義，生産力理論（F．A．ウォーカー）など——を援用した。そして，フェビアンたち，とくにその指導層は，「ひとつには理論の点で，ひとつには連帯の点で，すこぶるしっかりと」[26] 後者の系列に属していた（ウェッブ夫妻およびショーにおける，T．H．グリーンらオクスフォード派ヘーゲル主義者からの影響，ビスマルク的集産主義者ホルデーンらとの親交，歴史学派への「極端な賛成」，ウォーカーの生産力・能力理論の援用。一般に，帝国主義支持。また，とくにシドニー・ボールやH．W．マクロスティにおける能率と独占との擁護，など）。

第2に，すすんでフェビアン協会員の社会構成をみると（この点，ホブズボームはきわめてくわしい統計調査資料を提供する），1892年をのぞき，全体の10％をこえなかった労働者会員をべつとすると，あとは，伝統的ミドルクラス（本来の近代ブルジョアジー）のグループ——その主力は，かの“Basis”の文章に唯一の修正をおこなわせたところの解放女性であって，この女性会員層は，全体の4分の1（1890年），または5分の1から6分の1（その後，1906年ま

(26)　Hobsbawm, *ibid.*, p. 262. 訳，239ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

で）を占めた——と，「自力出世型の知識職業人たちの，ずっと興味ある集団」[27]とにわかれ，指導的フェビアンたちは，後者に属した。そして，フェビアンたちのイデオロギーの顕著な無定型性は，結局かれらの主力が所属したこのあたらしい独自な社会階層，すなわちいわゆる“nouvelle couche sociale”——フランスやドイツにくらべてずっとおくれて，この国では1880年代以降にようやくミドルクラスの伝統的主流から分立・急増してきた有能で立身出世した知的職業人層（下層から身をおこしたホワイト・カラー層。高級公務員，著述家，ジャーナリスト，教師，芸術家，団体組織者，政治家などで，その主力は，俸給生活者だが，比較的に富裕。なお，伝統的職業たる医師・弁護士・僧職は，のぞかれる）——が，その「初期の段階では，自分たちを包摂してくれるようにはできていない社会構造に適合してゆくことは容易ではないし，また，その社会構造を修正するだけの力もない」[28]という状況にあったことに，由来するものであり，フェビアン社会主義に代表されたミドルクラス社会主義の立場とは，結局，このような知的新社会層における「比較的富裕なものの革命」[29]のイデオロギー，ないし「職業のエートス」[30]を，あらわすものであった。

ホブズボームによれば，フェビアンたちは，このように「新社会層」にリードされた非プロレタリア的な社会構成にもとづいて，第1次大戦までの主要活動期において，労働者階級の立場をあえて主張しなかったという国際社会主義運動中でも特異な立場にたち，非マルクス主義的，非ジャコバン急進的，非自由主義的，政治右翼的，また実践上はきわめて（マルクス主義以上に）セクト的でもあった。そして，そうであったかぎり，すなわち労働者政党の政治目標を自己のものとしなかったあいだは，フェビアンたちの神話的影響は，最近の研究によって，たんに量的に大削減されるばかりでなく，すすんで，社会主義

(27)　Hobsbawm, *ibid.*, p. 257. 訳，233ページ。
(28)　Hobsbawm, *ibid.*, p. 268. 訳，245ページ。
(29)　この言葉自体は，わかき J. R. マクドナルドの造語だったらしい（ホブズボームによる）。J. R. Macdonald, “A Rock Ahead,” *To-Day*, New Series, Jan. 1887, pp. 67-68. ただし，ショーおよびウェッブでは，より経営者的能率観に力点がかかった概念となっていることに，ホブズボームは注意を喚起している。
(30)　Hobsbawm, *ibid.*, p. 258. 訳，234ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

者としてのなんらかの質的な先駆性——たとえば，「修正主義」としての，あるいは実務的政策実践面での——さえも，否定されてしまうものであることを，ホブズボームは論定した。だから，むしろフェビアンたちの歴史は，「1880年代の社会主義復活という見地ではなくて，ヴィクトリア中期の諸安定の崩壊への，すなわちイギリス資本主義内部での新社会層・新構造・新政策へのミドルクラスの反應という見地において，つまり，帝国主義の時代にたいするイギリス・ミドルクラスの適應として」[31]把握されるべきであり，その意味でフェビアンたちは，その影響や姿勢がたとえどうであったにせよ，もともと「社会主義運動・労働運動の，本質的ではなく偶然的な部分とみられなければならない」[32]とされたのである。

ただ，それだけではない。以上のすべてにもかかわらず，ホブズボームは，最後にもう1歩をすすめて，より小さな，むしろ少数人の個人伝記的問題とはなるのだが，時の経過が教えた点として，指導的フェビアンたちの社会主義追求の「真剣さ」についてわれわれの注意を喚起している。「フェビアンたち，あるいはむしろウェッブ夫妻とショー，が社会主義を真剣に受けとめたことは，かれらののちの政治的進化によって示されているとおり」であって，ウェッブ夫妻とショーは，「異例な種類だったにもせよ，うたがいもなく社会主義者であった。」[33]「フェビアンたちの失敗もかれらの連繋関係もともに，かれらを帝国主義・団体資本主義およびそれに付随する国家官僚制のたんなる代弁者としなかった。かれらは，みずからの胸中では社会主義者だった。もしそうでなかったら，かれらは，おそらく労働運動・社会主義運動とのかかわりをつくったり，ましてやすすんでそうした運動の圏内にひきこまれたりすることもなかったであろう。」[34]現代の，あまりにも右に寄りすぎた労働党の水準からみれば，初期フェビアンたち全体が，すでに極端な改革者であるばかりか，危険な急進主義者と映ずるだろうが，そういう意味・段階では，かれらはじつは「改良主義の守護聖

(31), (32)　Hobsbawm, *ibid.*, p. 266. 訳，242－243ページ。
(33)　Hobsbawm, *ibid.*, p. 254. 訳，230ページ。
(34)　Hobsbawm, *ibid.*, p. 263. 訳，240ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

者」なので，けっして危険でも急進的でもなかった。問題は，ウェッブ夫妻とショーが，目標としての社会主義については終始きわめてシリアスに考えたということであって，その結果，かれらが「政治的進化」をとげて最終的には社会主義を達成するためのタクティクスのあやまりを率直にみとめ，ソヴィエト共産主義の熱烈な支持者として生涯をおわったということは，きわめて重要だ，とホブズボームは指摘する。この帰結は，けっして穏健主義者の考えたがるように老衰のせいではなく，逆にかれらの一貫した理性の前進の到達点なのであり，「ショーあるいはウェッブ夫妻の初期思想の注意ぶかい研究者は，かれらののちの忠誠心のうちにそれと矛盾するものをなにも見いださないであろう。かれらはつねに，社会の徹底的再建を信じていた。」[35]だからこそ，若き日のイギリスの政治装置にけっして身をゆだねず，自由党に滲透をはかっても自身はけっして自由党とはならず，あくまで心情ではなく理性に従って，右にまた左に模索し，最後に，ベアトリス・ウェッブをしてマルクスのただしさを信ぜしめるにいたったのだ。が，この真相は，まだろくに知られていず，この点で「ウェッブ夫妻ほど，一貫してその思想を無視されてきた社会思想家も，すくない」[36]とされる。

IV

以上，筆者は，ホブズボームのフェビアン社会主義解釈の内容をかなり詳細にたどってきたが，これは，かれの主張がおそらく現時点におけるフェビアン社会主義研究の最も進んだ水準を示すものと考えられるからである。要するにホブズボームは，一方で，フェビアン神話の崩壊の具体的諸側面をエンサー，マクブライア，P．トムスンらに従って決定的に確認しながら，一歩をすすめて，フェビアンたちのイデオロギーをとりわけヴィクトリア＝エドワード期イギリスの社会階級構成の変化との不可分の関連で発生史的にとらえなおすことによって，神話崩壊の根拠を，きわめて具体的な，史的唯物論的と同時に一面

(35) Hobsbawm, *ibid.*, p. 254. 訳，230ページ。
(36) Hobsbawm, *ibid.*, p. 255. 訳，231ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

では社会心理学的ないし知識社会学的でもあるような見地から解示し，あわせてピーズからマーガレット・コールまでの公的フェビアン史の観念的なオプティミズムを徹底的に破砕したが，同時に他方で，とくにウェッブ夫妻とショーの「社会主義」が，けっしてたんに経済の社会化を基本的に意味しないような諸項目にたいする曖昧・便宜的な偽称ではなかったことについても，ホブズボームは開拓的注意を喚起したのであった。ブランドの批判にもかかわらず，究局的にはかれらのものは，けっして「えせ社会主義」[37]ではなかった。結局，かれらがその所属社会階層の制約から，社会主義のプロレタリア的伝統を否定しつつ出発したこと，およびそれに伴うタクティクのあやまりが，かれらのすべての失敗の根本因だった，ということになる。

筆者は，以上のホブズボームの犀利な論旨につよく感銘を受けながらも，そのすべてが言われたのちにおいて，なお若干の重要な事項がかれによって見落とされていなかったかという点を，考えてみたいと思う。まず第1に，顧みればホブズボームのフェビアニズム批判は，指導的フェビアンたちが不断に労働運動の立場から離れ（とくに1887年の“血の日曜日”事件以降），もしくは重要な局面で不断にくいちがい，たちおくれながらようやく労働運動についていったという経過を，基軸とするものだったかと考えられるが，こうした遊離やくいちがいを，ホブズボームは社会階層帰属の制約から発生した特殊なイデオロギーにもとづくタクティクのあやまりで，無意味であるとみた。しかし，かれらのイデオロギーの社会階層的発生地盤が検証[38]されたからには，このイデオロギーがたとえ労働運動なり労働者政党づくりという見地からはたとえあやまりだったとしても，また当面はこのイデオロギーがどのように無力だったとして

(37) Hubert Bland, “The Outlook,” *Fabian Essays*, Jubilee ed., pp. 197–198.

(38) この論点の先例が，ないわけではない。たとえば，ミドルクラスにかんする保守党系の1研究書も，「イギリスにおける知的興奮の時期」としての80年代が「イギリス国民，とりわけミドルクラスの運命に決定的な10年間」だったとし，この時期の若い知識人層の役割が「ミドルクラスの自己意識」をはじめてあらわした点にあったとしている（それは，フォーサイト家の旧当主ティモシーの古いヴィクトリアニズムにたいするジョリオンの批判の立場に象徴される）。Roy Lewis and Angus Maude, *The English Middle Classes*, 1949; Penguin Books ed., 1953, pp. 43–46.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

も，このイデオロギー自体の歴史的必然性をたんに無意味だとしてかたづけることはできないのではあるまいか。むしろ，この遊離・くいちがいの必然性から発した，いわばミドルグラスのセルフ・アムビヴァレントな独特の社会改良的諸発想そのものこそが，いかにそれらが当面は「失敗」の累積にすぎなかったにせよ，やがて長期的に一定の意味を獲得していったのではなかろうか。

第2に，ウェッブ夫妻とショーは，このあやまりを終極的には改めて，言葉の本来の意味での「社会主義」をつらぬいたとされるのだが，かれらが最後に到着した「社会主義」の理論的意味内容は，かりにかれらがソヴィエト共産主義に共鳴したにせよ，はたして厳密にマルクスのそれであったのかどうかについて，筆者は疑問をもつのである。あらかじめ言えば，それは，マルクスのような生産力=生産関係のシェーマに立脚した社会主義のヴィジョンではなく，レント廃絶方式の，あくまで分配関係のシェーマに依拠した流通主義的社会主義のヴィジョンだったのではないだろうか。しかもこのような社会主義観は，じつは当初から一貫してかわらなかったのではあるまいか。ちなみに，初期フェビアニズムにおける「社会主義」の定義は，たとえばつぎのようであった。——「フェビアン協会によって理解されたものとしての社会主義とは，教区・自治体・州・中央のどれか最も適当な公的権威を用いての，一国の必要諸産業の組織と管理，ならびに国民全体による土地・資本の経済レントの一切諸形態の収取，を意味する。」(39)

第3に，もしそうだとすれば，かれらが最晩年に「あやまち」を主観的にはおおいにみとめたにしても，客観的・理論的にはすこしも改まったのではないことになるから，むしろそこには独特の非プロレタリア的・分配主義的「社会主義」，じつは一種の非自由主義的な社会改良主義の思想と実践の立場が，終始一貫してたどれることになるのではなかろうか（ブランドの批判が，また生きかえる）。そのような立場とは，おそらく，20世紀風に労働者階級に新・旧中間層を加えた勤労（「稼得」）する国民全体の利益を，レントを収取する不労所得者

(39) *Report on Fabian Policy*. (Drafted by Bernard Shaw.) Fabian Tract No. 70, 1896, p. 5.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

集団との対決において，とくに新中間層中のエリート専門職業知識人層の指導のもとに，擁護しようとする立場なのではないか。それは，イギリスに伝統的な土地社会主義の系譜を継ぐ点でミドルクラス的であると同時に，ショーが論じたように[40]，レント範疇に利子（資本所有のレント）とともに利潤（企業家的才能のレント）をも一旦含めたあと，才能のレントは稼得的所得だから賃金に準じうるという理由で結局利潤をア・ポステリオリにレント範疇からはずしてしまうという点で，ミドルクラスに対して愛憎両様的でもあるような立場だと，言いうるのではあるまいか。

もとより，イデオロギー分析の視角だけからすれば，フェビアニズムにおけるそのような全勤労国民的立場を分析しても幻想以外になにもでてはこないとも言えよう。しかし，事実は幻想であったかもしれないにせよ，フェビアンたちが主張しようとしたのは，まさにそのような，労働者階級に新旧中間層（ただし，この国では旧中間層は少い）をも加えたところの全勤労国民的利益一般のための不労所得の漸進集産主義的再分配なのであった。集産主義という目標をしばらくべつとすれば，漸進的分配改善という点で，フェビアニズムはまさに社会政策思想としての条件を獲得したわけであった。考えれば，フェビアン協会がほとんどその発足の瞬間から（厳密には，協会内の無政府主義的および革命社会主義的要素を実質的に追放したときから），一方では自由党と，他方ではＳＤＦやＳＬと対立したかぎりにおいて，たとえフェビアンたち自身にとってはその究局目標がいかにシリアスな集産主義体制だったにもせよ，すくなくとも対外的・客観的には，その綱領の諸内実は，まぎれもない社会改良の諸方策の白昼下の提案にほかならなかった[41]。ただ，そのような社会改良のつみかさねによって議会主義的・漸進的・長期的に集産制（社会主義）を実現しようというのであった。これは，「社会主義復活」期から世紀転換期にかけてのイギリスに，自

(40)　*Fabian Essays*, pp. 9, 15n, 183–184. 参照，拙稿「ショーにおけるフェビアン社会主義の確立過程」『香川大学経済論叢』第50巻第3・4号，1977年10月，24ページ。

(41)　この点については，別途に具体的に検討したい。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

由党的社会改良思想とならんできわめて独自に登場したところの社会改良思想であったと考えられる。

もっとも，自由党的社会改良（そのイデオロギーは，世紀転換期に「新自由主義」として定型化された）が，自治体の社会化から社会保険や完全雇用にいたるまで，分配の改善とはいっても，階級間の再分配をタブーとすることで断乎としてミドルクラス主流の伝統的利益を擁護する，受益者負担方式の，つまり勤労者どうしの所得再分配を主張し，その実際性によって成功裡に「福祉国家」の形成に主導的役割を演ずることになった（後述参照）のに対して，フェビアン的社会改良は，レントの集産主義的な階級間再分配自体を目ざし，その実現過程として主張され，そのロマン性のゆえに（指導的フェビアンたち自身の実務的有能さにもかかわらず）頓挫をかさねたという点で，両者はたがいに区別される。なおフェビアン的社会改良は，民主的分配社会主義を目ざすから，戦前ドイツの講壇社会主義とは，たとえほとんど有機体観にたった全勤労者のための分配改善というロマン的政策目標においては近似的でも，後者がユンカー的ドイツ帝国の立場からあらゆる社会主義に反対したという点で，決定的に異なると思われる。さらにフェビアン的社会改良は，その目標を社会主義の実現に置くとはいえ，戦前のドイツ社会民主党的社会政策の立場とも，後者が階級闘争的労働運動の立場にたった点で，明白に相違するだろう。——

およそ以上のような位相をもつものとしてのフェビアン社会主義の社会政策思想面の独自なロマン的性格は，ホブズボームの「失敗」という1語によって洞察的に示唆されたとは思われるが，なおいますこし積極的・動態的に規定する余地がありはしないだろうか。また，さらに一歩をすすめて，新自由主義的「福祉国家」がすでにゆきづまった現代の国家独占資本主義時代において，あらためて初期フェビアニズムが現代的社会改良のために示唆する一種の長期的な有意味性が，ホブズボームの批判的総括のあとでもなお残された課題とならないだろうか。

こうした課題を念頭に置きながら，ホブズボームの論旨をめぐってさらにいくつかの論点を吟味しておきたい。その第1は，指導的フェビアンが所属した

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

とされる「新社会層」とイギリス資本主義の発展段階との照應の理解のしかたにかんする問題であり，第2は，「非プロレタリア的」社会主義なるものの理論的成立根拠の問題であり，第3は，フェビアン社会主義の社会政策思想の内容そのものにかんする事項である。

第1に，ホブズボームは，フェビアン社会主義の特色をとりわけ能率（ウェッブ）や才能（ショー）にささえられた合理的・集産主義的組織への信頼と，そうした組織におけるかれらの役割意識とを核心としたものだとみ，こうした特色を，フェビアンたちが所属した「新社会層」の「職業のエートス」から，ちょうどマックス・ウェーバーがイギリスにおける資本主義精神の起源を近世ミドルクラスのピューリタニズムに媒介された職業のエートスから導出したのを想起させるような手法で，発生史的に導出したと言ってよい。ただし，ウェーバーの場合とは異って，ホブズボームはここに成功と連続的発展ではなくて失敗と孤立的寂滅の物語りだけを看取した。(42) フェビアンたちが「新社会層」の無定型的なイデオロギーの枠から一歩踏みださないかぎり，かれらは，伝統的ミドルクラスそのものに対しても，また労働者階級に対しても，なんら積極的・実質的・永続的な影響を与えることはできず，しょせん「社会主義運動・労働運動の本質的部分ではなくて偶然的な部分」たるにとどまったのだ，という解釈は，他方，おなじ富裕な「新社会層」に所属して出発しながらも大飛躍によって労働者階級とその階級闘争の立場に目ざめ，ミドルクラスのきずなを断ちきって革命的社会主義の理論と実践にとびこんだハインドマンやモリスの活動が，かれらの個性的なそれぞれの貢献または攪乱を越えて，労働者階級自身の自発的な組織と運動との自然的動向に密着したかぎりでのみ長期的・発展的な意義をもちえ，そうでない側面では不断にことごとくたちまち挫折した，と

(42)　どの国でも労働運動にたいする知識人の態度には隔離・密着の両タイプがあり，アメリカではむしろ隔離型がふつうだが，イギリスでは，ウェッブ夫妻は隔離・失敗型，R. H. トーニーは密着・成功型のそれぞれ典型をなすものだ，という主張がある。Cf. J. A. Hall, "The roles and influence of political intellectuals: Tawney vs Sidney Webb." *British Journal of Sociology*, Vol. 28, No.3, Sept. 1977.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

いう解釈[13]と，一対をなすものとして，理解されていると思われる。

しかし，この正統的マルクス主義の理解図式は，あくまでイギリス資本主義の史的発展の近代から現代への推転という長期的視野のもとで動態的に適用されなければならないであろう。イギリス資本主義も，第1次大戦を境として段階的変貌を示し，とりわけ世界恐慌を画期として言葉の最終的な意味での「自由放任の終焉」(ケインズ) を迎え，社会改良は労働党・自由党・保守党の区別をこえて台頭し，「福祉国家」状況へとすべりこむが，この歴史の長期的動態からふりかえれば，「テクノクラット的・経営者的思想家の小グループ」[44]だったフェビアンたちの社会政策的諸提案がこの国の「国家資本主義」的改良思想の源流としてもつ特殊な長期的有意味性が，ホブスン，ケインズ，ベヴァリッジの系列の意味とはまたちがった文脈において，あらためて検討に値いするのではあるまいか。加えて，かつては，19世紀80年代以降30年間の創世記時代では無力とされた“nouvelle couche sociale”も，その後の行政・教育・情報・文化諸側面の顕著な機構拡大・大衆化とともにおそらくおおいに急増して有力となり，その思想パターンも，かつての無力な無定型さからシフトして，たとえば「経営者革命」(J．バーナム) にかんしてジョージ・オーウェルが批判的に警告したほどの権力の実質的主人公としてオールマイティな無定型さへと，アメリカほどではないにせよ，たしかにこの国でも推転しつつあるかもしれないのであって[45]，この発展的系譜の出発点を指導したフェビアンたちの影響力について短期的な視点だけで評価をすませてしまうことには，問題があるように思われるのである。

V

第2に，ホブズボームは，フェビアンたちの社会階層構成がすぐれて「非プロ

(43) Cf. Hobsbawm, *Labouring Men*, Ch. 12, “Hyndman and the SDF.” 訳, 208-215ページ。
(44) Hobsbawm, *Industry and Empire*, 1968, p. 142.
(45) George Orwell, *James Burnham and the Managerial Revolution*, 1946, esp. p.18. Cf. Lewis & Maude, *op. cit.*, pp. 234-235.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

レタリア的」だったことを論証するかたわら，かれら，とくにウェッブ夫妻およびショーの社会主義志向の一貫したシリアスさ——「社会主義の必然性についてのかれらの確信」[46]——についてとくにわれわれの注意を喚起し，最終的にかれらの「理性」が「マルクスはただしかったし，フェビアンたちはまちがっていたと，ベアトリス・ウェッブに確信させたとき，かれらはそれに従って，後悔することがなかった」[47]ことを力説しているが，これはただしいだろうか。私見では，厳密にみれば，この認定は疑問をはらむように思われる。ウェッブ夫人は，言葉としては，ないし主観的には，たしかに「利潤追求的資本主義の史的発展にかんするマルクス理論へのわれわれの転向」[48]をみとめたにしても，筆者の知るかぎり，その転向の理論的内容についてなんら説明を残してはいない。この「転向」とは，はたして，あのショーの「近代社会主義は，マルクスの価値論にもとづいてはいない」という命題（1887年）[49]の撤回をも含んだのであろうか。

私見によれば，まずショー自身については，明白・決定的に否であるし[50]，また，ウェッブ夫妻がマルクス労働価値論の復位を肯定したことは，かれらの長命のあとでも結局ないままであったと推定される。なぜなら，すくなくともウェッブ夫妻の最晩年の基礎理論的著作たる『資本主義文化の腐朽』（1923年）では，従来のレント即剰余価値という，ショーに従った理論が依然として堅持されているようであるし[51]，『ソヴィエト共産主義：あたらしい文明』（1935年初版）

(46), (47) Hobsbawm, *Labouring Men*, pp. 254–255. 訳，231ページ。

(48) B. Webb, *Our Partnership*, pp. 489–490.

(49) Cf. G. B. Shaw, "Marxism and Modern Socialism," *Pall Mall Gazette*, May 7, 1887.

(50) ショーの *The Intelligent Woman's Guide to Socialism, Capitalism, Sovietism and Fascism*, 1st ed. 1928, Pelican Books enlarged ed. 1937(esp. §§32, 70) も，*Everybody's Political What's What*, 1944 (pp. 22, 313–318) も，ともに明白にレント即剰余価値の理論を維持し，マルクス労働価値論を拒否して限界効用理論を援用しつづけ，*Fabian Essays* 中のみずからの Economic Basis 論を明確に再確認している。なお，参照，拙稿「ショーとウィックスティード——イギリス社会主義思想史のひとこま——」香川大学経済学部『研究年報』15，1975年；および前掲「ショーにおけるフェビアン社会主義の確立過程」。

(51) S. & B. Webb, *The Decay of Capitalist Civilisation*, 3rd ed. 1923, Chap. II, esp. pp. 16–19.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

では，資本主義経済解明の理論的問題はノータッチのままであった。ホブズボームは，「社会主義とは，生産・分配・交換の手段の社会化を意味するという点を，かれらはけっして疑わなかった[52]」として，指導的フェビアンたちの社会主義志向の「シリアス」さを論断する。しかし，ここには飛躍が感ぜられる。ショーはもとより，ウェッブ夫妻もまた，ソヴィエト共産主義の成立においてマルクスの社会主義経済理論の最終的承認というよりも，むしろじつは集権国家によるレントの再分配の達成を流通的視点からのみ確認しようとしたにすぎないのではなかろうか。この点，ホブズボームの解釈には重要な理論的飛躍があるように思われる。レント即剰余価値の理論が，20世紀において理論的にシリアスとなりうるのは，現代資本主義において拡大・び漫した独占利潤を批判する武器として一定の範囲で役だちうるからであると考えられるが，それを言うためには，ホブズボームは，議論を1906年でうちきるべきではなかったであろう。マルクスの労働価値論を明確に承認しないままでのたんなる独占的不労所得の増大の指摘とその再分配の主張は，たとえ土地国有化を上のせしても，基本理論的にヘンリー・ジョージないしリカードウ派社会主義への回帰にすぎないであろうが，かえってそのゆえに，それは自由主義的「福祉国家」を批判しうる，もう1つの系譜の社会改良論ともなりうるのではあるまいか。

第3に，ホブズボームは，フェビアンたちにおける独占肯定志向について，種々の例をあげて，いわば奥歯にものがはさまったような示唆を与えているが，これは，「独占」の意味を曖昧ならしめる議論ではなかろうか。なぜなら，なるほどフェビアンたちがトーリー的右志向への動揺を不断にみせたことは事実だったとしても，ショーたちが理論的に終始最もはげしく反対したのは，独占にもとづく不労所得範疇としてのレントの私的収奪なのであり，かれらの唱導した社会主義とは，コレクティヴな立場からのこのレントの平等な社会的再

(52) Hobsbawm, *The Lesser Fabians*, p. 1. なお，ホブズボームの原語表現は，"the socialisation of the means of production, distribution and exchange" であって，「生産手段」「交換手段」はわかるとしても「分配手段」は難解であろう。しかし「生産手段と分配と交換との社会化」と訳すべきでもあるまい。いずれにせよこの定義は，土地社会主義と科学的社会主義との区別を埋没させる効果がある。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

分配にほかならなかったはずだからである。マルクスもみとめたように，独占もまた社会化の資本主義的形態ではあるとしても，フェビアンたちがそれを集産主義的社会化といい加減にごっちゃにして肯定したとは，到底考えられない。ホブズボームは言う，「ウェッブ夫妻およびショーが，米人F.A.ウォーカーの経済学に負うところがあったことにも部分的に沿うて，大企業あるいは独占企業をさえ，能率・視野および高賃金支給能力にすぐれ，自由放任に関連することが少いという理由で，中小企業よりもはっきりと好む傾向を示したのも，興味あることである。[53]」「ベアトリス・ウェッブ（『われわれの提携』205ページ）およびショー（『救世軍少佐バーバラ』のアンダーシャフトや，なかば風刺にすぎない『百万長者の社会主義』）の周知の文言に加えて，産業集中の擁護を含むシドニー・ボールの『社会主義の道徳的諸側面』（フェビアン・トラクト第72，1896年——“特権ではなくて能率の独占”——）およびとくにH.W.マクロスティの『イギリス産業におけるトラスト運動』（ロンドン，1907年）に言及する値うちがある。高級官僚でありフェビアン執行部メンバーだったこの著者は，トラスト禁止法の提唱に反対し，イギリスの企業の共同行為を“もっぱら生産および分配の道具としてのその有効性”によるものだと正当化している[54]」と。

もとよりフェビアンたちにも種々の見解が問題ごとにありえたわけだし，独占現象一般のなかに集産的能率の達成面をみた者があっても，ふしぎはない。しかし，私的独占はかならずレントを生むこと，そしてレントは排撃されるべく再分配されるべきだということは，フェビアニズムの最も基本的な主張点だったはずである。たしかにショーの『救世軍少佐バーバラ』における富裕な軍需大独占資本家アンドルー・アンダーシャフトの倫理（「貧困は最大の悪徳」）に基礎づけられた思想は，国家独占資本主義体制の実質的支配者のイデオロギー——救世軍や社会主義運動の倫理を一蹴し，「百万長者たることが，私の宗教」だと断言してはばからないていの強力な自信と現実的行動力——をあらわしていると思われるが，しかしショーは，サミュエル・バトラーから学んだこ

(53)，(54)　Hobsbawm，*Labouring Men*，pp. 263，271. 訳，239－240ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

のイデオロギー描写を，例によってシリアスな逆説としてうちだしたと考えられるのであって（『百万長者の社会主義』も，同様），このことからショーがただちに独占に味方したとみることは，できない。ショーの真意は，むしろアンダーシャフトの娘バーバラの，「私には階級がありません。私は全人民の心からストレートに出てきたのです。」という言葉のうちに示唆されているとみるべきではあるまいか。(55)

ベアトリス・ウェッブは，ホブズボームの指摘した箇所（1901年段階）において，たしかに工場立法の一層の推進のためにもっぱら大雇用主の同意のとりつけに関心を集中し，小雇用主を軽視したようにみえるが，しかし，日記の文意に徴して，これはあきらかにタクティクの問題であったと思われ，ベアトリスの真情は，あくまでアンドルー・アンダーシャフト的人生観への反発にあったと思われる。オクスフォード大学派のフェビアンで，ラスキンやモリスのつよい影響を受けたシドニー・ボールが，彼としてはフェビアニズムの基本思想のために書いた唯一のフェビアン・トラクト（1896年）において，「特定産業の恒久的組織化」にかんして「特権ではなくて能率の独占」を説いたときの文脈は，「私的資本家によって支配される独占」にかわるべき「社会共同体（コミュニティ）によって支配される独占」の主張ということなのであって，私的巨大資本と国家権力との癒着を中心とした国家独占資本主義体制の擁護をしたわけでは，けっしてない。(56) 自由党派の大蔵官僚で，若手のフェビアンとして1895－1907年の間，協会執行部において8時間労働日や最低賃金制や独占対策や教育制度などについて網羅的に活発な論陣を張ったところのマクロスティは，とくに独占については世紀末ごろから関心をもち，2つのトラクトと2冊の著書とを出しているが，(57)

(55) Shaw, Preface to *Major Barbara*, The Bodley Head Bernard Shaw, Vol. III, pp. 23-33. Cf. N. & J. MacKenzie, *The First Fabians*, pp. 108-109.

(56) Sidney Ball, *The Moral Aspects of Socialism*, Fabian Tract No. 72, 1896, esp. p. 6.

(57) Henry Macrosty, *The Growth of Monopoly in English Industry*, Fabian Tract No. 88, 1899; *State Control of Trust*, Fab. Tract No. 124, 1905; *Trusts and the State*, 1901; *The Trust Movement in British Industry*, 1907. Cf. Pease, *op. cit.*, pp. 157-158 & 157n.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

かれは，独占の不可避的進行および独占と国家権力との癒着（「過大な富裕階級の国家への侵入」）の危険について指摘したうえで，それへの対策として産業国有化をうちだしているのであって，ホブズボームの言うように「産業集中の擁護」という表現でその主張を要約するのは不正確だと思われる。

要するに，総じてフェビアンたちは，当面，資本主義的産業化を前提とするかぎりは，巨大な独占と過大な富裕とが国家権力にむすびつく傾向は不可避であり，それを独占禁止法だけで直接押さえようとしても到底不可能だと，実際的・諦観的に観察したうえで，それに対抗する方策として「国民」の名による産業国有化を，政策論的に展望したわけであった。しかし，産業国有化の理論的力点は，けっして生産手段の国有化ではなくて，私的産業の収取するレントの国有化と再分配とにあったとみるべきであろう。この辺の判別にかんする考察を，ホブズボームは，すくなくとも当面の議論においてはまったく欠落させたように思われる。問題は，フェビアンたちが漸進的な産業国有化を社会主義の実現過程そのものだと考えたのにたいして，客観的には，それはじつはむしろ国家独占資本主義段階に入りつつあったイギリス国家のための1つの修正資本主義的な政策立案にほかならなかったということにあるだろう。フェビアンたちは，独占を社会主義の立場から一義的に攻撃するかわりに，国家独占資本主義に移行しつつあったイギリス経済のもとでの「国民」の立場からの実際的な独占政策としての産業国有化を唱え，それをこえることはなかった。これは，結局，フェビアニズムが，「福祉国家」という名のホブスン＝マーシャル＝ロイド・ジョージ＝ベヴァリッジ＝ケインズ的な自由主義的社会政策を伴った国家独占資本主義の形成過程に対して，さらにもうひとつの集産主義的系譜の社会政策思想の束を，先駆的・長期的に対抗提示したことを，示唆する1証拠である。

VI

以上筆者は，ホブズボームのフェビアニズム解釈がなお言い残したと思われる若干点について考察し，それらが結局とりわけフェビアニズムのすぐれて社

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

会政策思想的な性格とその現代的関連とをめぐるものであることを，見当づけた。フェビアン神話がホブズボームらの吟味によって決定的に崩壊したあとでもなお，あらためてわれわれは，現代資本主義における国家の決定的な優位状況ないしいわゆる「福祉国家」状況のもとで，たとえばショー起草の1トラクト（1896年）が強調したつぎの言葉が，世紀転換期における代表的イギリス社会政策思想の1つとしてのフェビアニズムの特質と，その現代資本主義へのリンクの可能性とを物語っていると推定しえないだろうか。——「フェビアン協会の提唱する社会主義は，もっぱら"国家社会主義"(State Socialism)にほかならない。協会の外国の友人たちは，イギリスが，いまや……洗練された民主的国家機構を所有しているという事実にてらして，本宣言を解釈しなければならない。……大陸の諸君主国で存在しているような国家と人民との間の対立は，イギリスの社会主義者たちをたじろかせはしない。たとえば，自治体その他の地方団体が労働者階級に対して門を閉ざしているドイツで行なわれているような国家社会主義と社会民主主義との区別は，イギリスでは無意味である。[58]」

マクブライアやホブズボームやポール・トムスンが詳細吟味したところでは，フェビアニズムは，理論体系としても，またその社会改良の諸提案や実践のほとんどどの面でも，じつはこれといった独創的な論理や着想をみずからは編みだすことがなく，すでにミドルクラス的自由急進主義か労働者階級を地盤とした社会主義のどちらかに，個々的には先鞭をつけられていたものばかりだったという認定が，確立しつつあるように思われる。しかし，そこには，解釈上のゆきすぎがありはしないだろうか。

すなわち，第1に，フェビアニズを構成した具体的諸要素の1つ1つについてみれば，なるほどそうかもしれないが，フェビアニズムの特色は，イギリス型民主主義に立脚した「国家社会主義」に向けてのそれらの諸要素の独自な折衷的ないし総合的構成そのものと，その構成結果の雄弁な宣伝とにあったと言えるのではあるまいか。たとえば，フェビアニズムの独自な経済理論は，とりわ

(58) *Report on Fabian Policy* (drafted by Bernard Shaw), Fabian Tract No. 70, 1896, p. 5. Cf. McBriar, *op. cit.*, p. 98.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

けショーによるレント理論と限界効用理論とのユニークな合成に依存しており，この合成自体は，まさにフェビアニズムの独創的な成果だったと言ってよい。[59] また，たとえばかれらの主張の興隆期たる1887-91年の間に多数のフェビアン・トラクト群によって旺盛にうちだされた綱領中の諸項目は，個別的にはほとんどいずれも当時の自由急進主義派または社会主義諸派のどれかの綱領中に散見されるものばかりではあったが（マクブライアは，この諸項目を，つぎの4つに区分している。——1．民主主義の拡大および民主的統治の機構の改善。2．コミュニティの福祉，とくに労働者階級の福祉，を改善する国家機構の拡大。3．平等を促進するための積極的な国家活動。 4．その他，種々のもの。[60]），マクブライアも指摘するように，ここでもまた，フェビアンたちがそれらをまとめて総合的な1つの綱領とした点そのもの，そして，このことによって急進主義と社会主義とのあいだのギャップに橋をかけるという点での工夫そのものに，新奇さがあったと言えるであろう。[61]

第2に，フェビアニズムは結局，なによりもすぐれて政策思想なのであり，その明白に独自な領域は，「ナショナル・ミニマム」のスローガンを中心とした社会政策的諸主張にあったと言いうる。広義の社会政策的主張としては，これに租税社会政策や産業国有化や自治体社会主義の主張を加えなければならない。なお，ここでもまた，これらの諸政策の内容が全体として分配的社会主義の理想に向けて合成されながら説かれている点が，特徴的であると思われる。

そして第3に，「われわれが主要なフェビアンたちの真の偉大さを発見するのは，歴史研究の領域および政治的諸制度の叙述的な分析においてである」[62]（マクブライア）という点を，とくにウェッブ夫妻の厖大な著作業績を中心として，労働運動・労働政策分野についてすぐれて確認できることは，いまさら多言を要しないであろう。

フェビアンたちの社会政策提案には，（1）伝統的な社会改良（労働者保護，

(59)　前掲の2つの拙稿を参照。
(60)　McBriar, *op. cit.*, pp. 25-28.
(61)　*Ibid.*, p. 25.
(62)　*Ibid.*, p. 347.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

住民生活の改善と保障)，(2)自治体社会主義（地域的企業公営を含む)，(3)漸進的社会主義実現のための独自な方策としての企業国営ないし産業国有化，不労所得重課(累進所得税，遺産・地代重課など)，の3領域があったことが留意される。[63] このうち(1)は，「ナショナル・ミニマム」というスローガンでカバーされる領域であり，協会の最初期の約25年間に集中的に主張されたものであった。このスローガンは，フェビアンたちが，みずからうちだしつつあった政治社会政策をあらわすために1890年代半ばから用いはじめ（夫妻によるその現代的意味への拡大は，1920年ごろからである[64]），とくにウェッブ夫妻（『産業民主制』1897年）やマクロスティ（フェビアン・トラクト第83，同年）が最低賃金制提案のために定着させたものであるが，この政策は，工場立法や公衆衛生規制という長い1連の社会立法のたんなる拡張だとウェッブ夫妻が考えたものであった。フェビアン的宣伝の大部分が当初このような社会政策の具体的諸内容の主張に向けられていたことは，注意に値いするであろう。工場法の拡大，苦汗制反対，労使紛争調停制度の改善，8時間労働日，労災補償拡大，老齢年金，救貧法改革，住宅事情改善，教育施設拡大などをフェビアンたちは社会主義的志向の要求として唱導したが，もとよりこれらはイデオロギーぬきで主張可能でもあり，社会主義の枠外からも広い支持を得たわけであった。

他方，自治体社会主義にかんするフェビアン協会の諸提案・実践については，ウェッブが事実上書いたトラクト第8（1889年）およびかれが著者たることを明示した単行小冊子『ロンドン綱領』(1891年）が，基本文献であり[65]，実際にはほとんどもっぱらロンドンの行政に限っての主張であった。提案範囲は，水道，ガス，電車，ドック，流通販売業（酒類・牛乳・パン・火災保険・質屋など)，浴場，洗濯場，墓地，におよんだ。自治体社会化は，チェンバレンが市長だったバーミンガムをはじめ，すでにイギリス諸新興都市でかなり早くから

(63)　この区分は，マクブライアに負う。Cf. *ibid.*, Chap. IV, esp. pp.107-118.
(64)　S. & B. Webb, *A Constitution for the Socialist Commonwealth of Great Britain*, 1920, pp. 320-323.
(65)　*Facts for Londoners* (drafted by S. Webb), Fabian Tract No. 8,1889 ; S. Webb, *The London Programme*, 1891. Cf. McBriar, *op. cit.*, p. 187; Paul Thompson, *op. cit.*, p. 145.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

自由党派の推進によって，ムードとしては，すなわち「いまやわれわれは皆，社会主義者だ」という志向が社会主義とは無関係に，進行しており，ロンドンの場合，その巨大さのため，それら諸都市にくらべていちじるしくおくれていて，19世紀半ばごろまではなおほとんど中世的だったのが，1855年の過渡的な改革を経て，1888年のロンドン州議会〔ＬＣＣ〕設立以後やっと緒につき，おくれを急速にとりもどす機運となったが，いきおい，市政が政党政治化し，主力たる自由党系の進歩党のほかに保守系の穏健党，さらにやがて労働党（1910年以降）も誕生して，社会化領域のあれこれの是非が，都市自治の原理をめぐる集権主義・分権主義の対立ともからんで，論争をまきおこすにいたり，この場合，フェビアンたちは，それを社会主義の実現の方途として考えながらも，当面は滲透政策から進歩党に依存したが，当然限界があり，進歩党派は，せいぜい水道・ガス・電車・ドックについてまでは促進し，これらは実現したし，ＬＣＣ事業部やテムズ河蒸汽船サービスなどについても賛成したのであるが，流通販売業についてはそうはいかなかった。総じて，ロンドン市政（とくにＬＣＣ）における自治体社会主義は，じつはすでに自由党派の創意ある中心人物ファース（J. F. B. Firth）[66]がＬＣＣの第１期から先駆的に推進に努めつつあったわけで，すくなくとも形のうえでは，ファースの急死（1889年）後，第２期ＬＣＣ選挙で選出されたウェッブがファースの仕事を継承したのにすぎず，それにじつはロンドンの自治体社会主義は，すでにＳＤＦのハインドマンが創唱しており[67]，ウェッブの創唱対象は，わずかにドックだけであった。また，ＬＣＣ内部での公務員労働者のためのオリジナルな主張も，むしろＳＤＦ派のバーンズ（John Burns）が事実上もっぱら先導・推進したのだったことに，注意する必要があろう[68]。結局，自治体社会化におけるウェッブ以下のフェビアンたちの主たるメリットは，「あたらしい社会主義的な方向での自治体活動の拡大

(66) James F. B. Firth, *Municipal London*, 1876. Cf. Paul Thompson, *op. cit.*, pp. 81, 99, 117, 145; McBriar, *op. cit.*, pp. 189–196.
(67) H. M. Hyndman, *A Commune for London*, 1887. Cf. P. Thompson, p. 100.
(68) McBriar, *op. cit.*, chap. VIII, esp. pp. 190–198, 203, 222–233.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の宣伝家としてよりも，むしろ進歩党の枠内での行政家としての成功[69]」という点にあり，他面，かれらの宣伝力が，ロンドンの自治体社会化のおくれを衆目下に置き，総体的にそれを大促進するという効果をあげたことも，たしかであろう。もっとも，それはけっして社会主義の方向を示すものとはならなかった点に，かれらの影響力の限界をみなければなるまい。

自由党その他のブルジョア的利害と正面から対決するような社会主義的社会政策の領域が，一定範囲の租税政策をこえて現実に前進することは，労働党が政権につく以前では，ありえず，そこではむしろ産業国有化に伴うべき補償問題が，先決的な原理問題として，主として理論レベルで論争されるにとどまったといえよう。

最後に，社会政策の基本領域についてのフェビアンたちの考え方について，一言しておきたい。王命救貧法委員会の報告（1909年）のうちの少数派報告は，労働者代表も参画したとはいえ，ウェッブ夫人を中心とするフェビアンたちの推進した意見を主導的に盛ったこと，また，それが「福祉国家」理念を公文書としてはじめて先導的に示したということが，知られている。ただ，少数派報告の先導性は，じつのところ主として社会的サービスおよび公的扶助の権利性の確立の先駆的主張とそれにおうじての救貧法の抜本的改革の議論とにあったのであって，社会保険にかんしては，一見はなはだ洞察的でなかったことは，ホブズボームやマクブライアも指摘するとおりである[70]。とくに，イギリスの拠出制強制国営社会保険の皮切りとなった健康保険および失業保険の具体的構想の提示は，少数派報告ではなく多数派報告のほうの，大きな成果であった。すなわち，健康保険は，ビスマルク・ドイツから学んだロイド・ジョージが，また失業保険は，ロイド・ジョージの宰配のもとに，青年公務員 W. ベヴァリッジの研究と起草を基礎に，W. チャーチルとルエリン・スミスが加わって，それぞれ立案されたものであって，ともに1911年の国民保険法で実現することに

(69)　*Ibid.*, p. 233.
(70)　*Ibid.*, pp. 263-279. Cf. B. Webb, *Our Partnership*, p. 417. ホブズボームは，少数派報告を「完全に死産した」ものとしている。Hobsbawm, *Labouring Men*, p. 265. 訳，242ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

なった。これに対して少数派報告は，貧民の支払う保険料は人頭税にひとしく，「貧民の費用で貧困をなくすることは，できない」し，また，現実にも労働者側の猛反対で実現するはずもなかろうとして，これらの拠出制強制社会保険に反対し，ウェッブ夫妻は，そのキャンペーンを張ったが，肝心の労働組合側は，拠出制の損得よりもむしろ社会保険による組合の相互扶助活動分野の喪失をおそれていて，認可組合制度上の政府側の譲歩で，事実上反対陣営から脱落し，こうしてウェッブ夫妻は自由派に“してやられ”（“dished.” J. バーンズの評言）てしまった——そして，まさにこのことが，フェビアンたちが「自由党への滲透政策」の限界を決定的に悟ってついにこれを放棄する契機ともなった——という事実は，たしかに少数派報告の非実際的・ロマン的性格をはっきり物語るものであろうし，当面は公的扶助にかんする先見性のメリットを減殺することになったとも言えよう。けれどもこの点は，けっして誤解されてはならない。「国営保険および資本調達をば，社会主義は最重要とするであろう」[71]という『フェビアン論集』中のショーの命題を，われわれは想起すべきであろう。少数派報告における社会保険観は，フェビアンたちの表面的実際性のかげにかくれていた社会主義ヴィジョンのロマン性とピューリズムとをのぞかせただけではなくて，現代社会保障の原理上の基本問題点，すなわち，拠出原則ないし受益者負担原則をめぐる，またすすんでは「選択主義」か「普遍主義」かをめぐる，自由主義的な「福祉国家」の本質をこえるのかどうかという抜本的な問題点に，フェビアンたちが先駆的・直観的に気づいていたことをも，物語るものと言ってよいし，このことからも，フェビアニズムの社会政策思想の現代へのリンク状況が，示唆されるのである。けれども反面，フェビアニズムにおける分配的社会主義の理想そのもののロマン性こそが，このリンク状況を致命的に制約したわけでもあった。いずれにせよフェビアニズムの「無効」論議は，たんなる政治史をこえてここまで延長拡大された次元において再検討されなければならないであろう。

---

(71)　*Fabian Essays*, p. 25.